

口承文芸としてのグリム童話

—「灰かぶり」(KHM21)と新潟の灰かぶりを比較する—

12K005 井田 沙織

はじめに

グリム童話は口承文芸である。口承文芸とは、文字によらず口から耳へと伝えられてきた文芸の総称である。口承文芸は主に人の移動によって広範囲に分布していくことから、他地域で似た話があれば類話とされる。

グリム童話の中でも特に広い地域に多くの類話があるのが、「灰かぶり」である。日本の古典にも日本最古のシンデレラ・ストーリーといわれる『落窪物語』があり、私たちの住む新潟県にも「米福・栗福」というタイトルのよく似た昔話がある。「米福・栗福」とグリム童話の「灰かぶり」は、同じ口承文芸としてどのような違いや共通点を持っているのだろうか。

ここでは、「灰かぶり」と「米福・栗福」の比較を通して、昔話の構成、「灰かぶり」と「米福・栗福」のモチーフにおける類似点、「米福・栗福」のモチーフの多様性、「米福・栗福」と「灰かぶり」との相違点、語り口から見たグリム童話と日本昔話の共通点、の5つのテーマについて考える。

1. あらすじ

まず、新潟の「米福・栗福」の概要を説明する。とはいえ、「米福・栗福」は同じタイトルの昔話が新潟の他に秋田、山梨など広い地域に分布しており、新潟だけでも「ヌカブク・コメブク」などタイトルが多少違うものを含めて140話以上の様々なバージョンが存在する。⁽¹⁾ そのため以下のあらすじは、長岡市栃尾地域の「米福・栗福」を中心に2、3の話をもとめた基本の形である。

妻を亡くした栗福の父が再婚し、妹の米福が生まれる。あるとき継母は栗福には破れ袋、米福にはいい袋を与え、栗ひろいに行かせる。栗福は雀などの援助によって栗を拾うことができるが、日が暮れたので栗福は山中の家に泊まる。そこでお婆さんから頼まれごとをしたお礼に、なんでもでてくる打ち出の小槌をもらって帰る。

祭りの日、継母は米福を見物に連れて行き、栗福には留守番をさせて家事などをさせる。しかし人または雀がきて助けてくれ、打ち出の小槌をつかって美しく用意を整えた栗福も祭り見物へ行く。祭りで栗福はおまんじゅうなどの食べ物を配る。栗福は帰りに履物を落とす。

後日、栗福は祭りで見初められ、求婚される。継母は米福を嫁にやろうとするが、嫁比べ(靴

合わせ・うた比べ)の結果粟福が結婚する。米福はそれを羨ましがり、継母とそろって臼に乗って嫁入りの真似事をして川に落ちてタニシになる。

2. 昔話の構成

昔話はその骨組みだけを見ると、ほとんど同じものが別の話にされることがある。これは、昔話には共通するなにかがあり、それこそが昔話を構成する重要な要素だと考えられる。昔話に共通するなにか、とはいったい何なのか。

ロシアのグリムと呼ばれるアフナーシエフの『ロシア昔話集』のなかには、「魔法昔話」と呼ばれる100話の本格昔話がある。ロシアの文学者ウラジミール・プロップは、この「魔法昔話」はすべて「31個の機能」⁽²⁾で構成されているという。31の機能がすべて入っているわけではなくとも、順番通りに機能することで物語の進行する形が決まるとした。

一方アメリカのアラン・ダンダスはプロップが「機能」と呼んだものを、「出発」「帰還」といった「モチーフ素」と呼んだ。⁽³⁾ 物語は対応するモチーフ素によって話の基本的な枠組みがつくれ、それによって進行する形が決まるとした。

これらを踏まえて、小澤俊夫はモチーフを「1話を構成するうえでの主要登場者の主要な一行為、およびそれに直接的に対応する行為を含む単位」⁽⁴⁾と定義した。

以上のことから、共通するモチーフを順番通りに物語の進行に組み込むことが昔話の構成において、重要であると考えられる。そして共通する何かとはモチーフのことだといえる。

3. 「灰かぶり」と「米福・粟福」のモチーフにおける類似点

ここからはモチーフをもとに「灰かぶり」と「米福・粟福」を比較していく。

「灰かぶり」のモチーフは大きく分けて以下の3点である。⁽⁵⁾

- ① 家族から不当に冷遇され、美貌を隠している主人公
- ② 本来の美をあらわして着飾っているところを家族に見られる
- ③ 幸福な結婚 (アイデンティティの証明を含む)

まず①についてであるが、粟福は継母から破れた袋を与えられている。米福にはいい袋が与えられている点や、祭りの日に粟福だけ留守番させている点から見て、これは粟福が不当に冷遇されているといえる。

次に②については、粟福は打ち出の小槌でいい着物に着替えて祭りに行くと、「あんまりきれいだすけ、みんながあれはどこの娘だろうなとたまげて見ていた」⁽⁶⁾とあることから、本来の美しさをあらわしているといえる。その様子を見た米福が「あれはおいらどこの粟福でねえだろうか」と言うことから、家族に本来の姿を見られている。

最後に③についてである。祭りの後、粟福は殿様(継母たちよりも立場が上の人物)に求婚される。すなわち、不当に冷遇されていた粟福が、幸福な結婚により地位を回復することになる。アイデンティティの証明については、「米福・粟福」でも履物を落とし、それにぴったりと合う

ことで証明されている話が存在する。

このことから「灰かぶり」と「米福・栗福」はモチーフに類似点多く存在するといえる。

4. 「米福・栗福」のモチーフの多様性

グリム童話の「灰かぶり」のモチーフは、そのほかのグリム童話にモチーフの一部が使われている場合がある。例としては、「千匹皮」(KHM65)の主人公が本来の姿に戻ったところをみられて、王様に求婚されることがあげられる。

新潟の「米福・栗福」でも、他の日本昔話にもモチーフがそのまま抜き出されたかのような別の話が存在している。抜き出されたのは、うた比べをして勝利することによって幸福な結婚をする、というところである。うた比べとは即興で和歌を詠み、その優劣によって勝敗を決める遊びのことである。題名は「皿々山」といい、妹が汚い歌を詠んだ後、姉が美しい歌を詠み勝利して嫁に行く「米福・栗福」と全く同じ流れである。しかし、「米福・栗福」は日本昔話とグリム童話だけでなく、ペローの「サンドリヨン」とも共通したモチーフを持っている。祭りに行った栗福がまんじゅうを配るところが、「サンドリヨン」のオレンジを継母たちに分ける場面と共通している。

これらのことから「米福・栗福」は単純な形の物語にとどまらず、グリム童話の「灰かぶり」と比べてモチーフに類似点を持つ様々な他の話と結合し、多様なモチーフを有する話であるといえる。

5. 「米福・栗福」と「灰かぶり」の相違点

「米福・栗福」のモチーフの多様性については先述したが、それに伴って話にも多くのバージョンがある。あらすじでも書いた通り、140以上もの話の中には「米福・栗福」に「灰かぶり」のモチーフがあるものとなないもの、あってもモチーフが変更されているものがある。例を挙げると、③幸福な結婚にあるアイデンティティの証明についてなどである。「米福・栗福」ではアイデンティティの証明というより、教養を持つことの証明といえる試練が与えられる場合が多い。

試練とは、嫁比べのことである。「灰かぶり」では靴合わせがそれにあたる。古いドイツの慣習によれば、靴は婚約に際して用いられた現代で言う指輪のような役割を持っている。靴を花嫁に履かせることで、花嫁は履かせた相手の権力下におかれることを意味する。これは、ヨーロッパの父権的な文化をあらわしていると考えられる。さらに「灰かぶり」の靴は黄金＝王権を象徴するものであることから、それを得た灰かぶりの地位は向上し、王子と結婚する資格を持つことになる。靴合わせに勝利することで、灰かぶりはアイデンティティを証明しているが、教養があることを証明しているとはいえない。

「米福・栗福」でも足袋や下駄に代わってはいるが、「灰かぶり」と同じように靴合わせをする話はある。しかし勝利した後でも継母が納得しない話や、そもそも靴合わせが存在しない話が圧

倒的に多い。靴合わせをしても継母の反対で結婚できないということは、平安時代に代表される婿入りのような昔の日本の母権的な文化をあらわしていると考えられる。日本は徐々に父権的な文化に変化していくが、それ以前からこの話が存在したとすれば、時代の変化に従ってあとから靴合わせのくだりが追加された可能性もある。

靴合わせがない場合に行われるのは、うた比べである。平安時代から和歌は女性の大切な教養のひとつであった。そのために歌合せに勝利した粟福は美しさだけでなく、教養もあることが証明される。このことから、「米福・粟福」ではアイデンティティの証明による幸福な結婚から、教養があることの証明による幸福な結婚という、日本的なモチーフに変更されているといえる。

6. 語り口から見た「灰かぶり」と「米福・粟福」の共通点

グリム童話も日本昔話も人から人へ語り伝えられてきた口承文芸である。口承文芸には、その語り口に共通点が存在する。たとえば、グリム童話で重要視される3回の言葉や行動の繰り返しは日本昔話においても同様で、物語の構成に大きな意味を持つ。この共通する3という数字や、言葉や行動における繰り返しは、口承文芸ならではの技法によるものである。

口承文芸としてのグリム童話と日本昔話に共通する繰り返しは、主に以下の3点である。⁽⁷⁾

- ① 言葉送りの繰り返し
- ② 言葉と行動の繰り返し
- ③ 3度の繰り返し

まず①の言葉送りの繰り返しは、「米福と粟福がいた。米福にはいい袋、粟福には破れ袋を持たせた。粟福は粟を拾うことができなかった。」といったように話の一区切りが終わって次へ話を推し進めるとき、話の残像を生かして次へと展開していく方法である。口から耳へ長い話を渡すときには、話をスムーズに展開する流れを作ることが欠かせない。これはそのための重要な技術である。

次に②の言葉と行動の繰り返しは、「灰かぶりは王子からすりぬけて鳩小屋へ飛び込み逃げることができた。次の日も梨の木を飛び越えて王子から逃げることができた。その次の日も逃げることができたが、王子の策略によって靴を片方落としてきてしまった。」というように、語り手は聞き手がすでに知っている表現を繰り返して話す。それは聞き手にとっての記憶の支え、体験の更新となり体験の強化となる。

そして③の3度の繰り返しは、3度繰り返すことによって一方的な語りではなく、掛け合いの遊び語りになる。それによって聞き手は語りを自らの口に乘せ、自分の話として楽しむきっかけをつかむことができる。これによって3度の会話の繰り返しは聞き手の記憶に強くとどまり、物語を長く伝えていくための中核となるのである。

以上のことから、口承文芸には長く人に伝えられていくための技法が含まれているといえる。現代まで残った口承文芸であるグリム童話や日本昔話に類似点・共通点が多々見られるのは、モチーフの面だけでなく、確立された語りの技法にも起因すると言っていいだろう。

おわりに

以上、5つのテーマについてまとめたが、そこから明らかになることは、2点ある。グリム童話と日本昔話は多少違う箇所があっても、大筋ではとてもよく似ていることから、人の考えることはどこでも共通する部分を持っていること。グリム童話や日本昔話のような口承文芸は、過去の人々が語りを技術化してまで現代に伝えようとしたことである。このことから、人が人へ語り伝えてきた口承文芸は人種や国境を越えて共通する知的財産であり、これからも伝えていかなければならないものであると私は考える。

グリム童話は文字に起こされ、子どものために再編集されて出版され、全世界で読まれている。グリム童話は、口承文芸を記載文芸に変化させることで、未来に口承文芸を伝えているのである。

注

- (1) 久保華誉『日本における外国昔話の受容と変容—和製グリムの世界—』三弥井書店、2009年、333頁。
- (2) 小澤俊夫『グリム童話集200歳 日本昔話との比較』小澤昔ばなし研究所、2012年、109頁～112頁。
- (3) 同上、113頁。
- (4) 同上、137頁。
- (5) 稲田浩二、稲田和子編『日本昔話ハンドブック新版』三省堂、2001年、118頁。
- (6) 水沢謙一編、稲田浩二監修『日本の昔話8 越後の昔話』日本放送出版協会、1974年、144頁。
- (7) 稲田、前掲書、213頁～215頁。

参考文献

- 金田鬼一『完訳 グリム童話集(一)』岩波書店、1979年
小澤俊夫『グリム童話集200歳 日本昔話との比較』小澤昔ばなし研究所、2012年
松谷みよ子『松谷みよ子の本 8 昔話・全1冊』講談社、1995年
高木昌史『グリム童話を読む辞典』三公社、2002年
久保華誉『日本における外国昔話の受容と変容—和製グリムの世界—』三弥井書店、2009年
水沢謙一『新潟県の昔話集』野島出版、1974年
稲田浩二編『日本昔話 上』筑摩書房、1999年
水沢謙一編、稲田浩二監修『日本の昔話8 越後の昔話』日本放送出版協会、1974年
稲田浩二、稲田和子編著『日本昔話百選』三省堂、2003年
稲田浩二、稲田和子編『日本昔話ハンドブック新版』三省堂、2010年
「歌合せ」<http://dictionary.goo.ne.jp/leaf/jn2/19037/m0u/> (2015年4月21日閲覧)

(レポート指導教員 桑原ヒサ子)